

# 生活科の研究について

田畑 圭

生活科が目指す「子供が学びをつくる姿」

詳しくは目指す子供の姿シートへ

これまでの2年間の研究を生かし、今年度生活科では「子供が学びをつくる」姿を下記のように設定しました。また、この姿を実現するための支援を整理しました。

## 【課題設定】

**子供の姿** 身近な生活を自分との関わりで捉え、よりよい生活にむけて思いや願いを実現しようとする。

**支援** 子供が対象と繰り返し関わるができるようにしたり、子供が対象との関わりについて思いや願いがもてるようしたりと支援する。

## 【課題追究】

**子供の姿** 具体的な活動や体験で得た気づきを友達と伝え合ったり、自分や友達の活動について振り返ったりしながら、対象との関わりを捉え直していこうとする。

**支援** 子供が自分の課題追究方法を選択できるようしたり、子供にとって必要感のある伝え合いの場を設定したりする。

## 【パフォーマンス】

**子供の姿** 追究の過程で得た気づきを今までの学習で身に付けてきた表現方法の中から適切と思われる方法を選択して表現する。また、追究の過程でよりよいものと考えたことを実践したり、活動中での意欲や自信を表出したりしようとする。

**支援** 子供の気づきを関連付け、課題解決の見通しをもてるようにし、子供が思考と表現を行き来できるよう学習環境を設定する。

これまでの研究を通して、子供が自己をメタ認知する支援によって、子供たちが高いモチベーションを維持し、活動を調整したり目的に応じて選択したりして、主体的に学び続けることが明らかになりました。今年度は、子供が「対象への思いや願い」、「学習方法や取組方」、「自分自身への気づき」に能動的に関与し、調整していく「自己調整」に整理・焦点化して、研究を進めてきました。

生活科研究実践における子供の「自己調整」

詳しくは実践指導案へ

生活科の研究実践「町の イイな つたえたい」では、子供の「自己調整」の姿を下記のように構想し、授業実践に取り組みました。

	対象への思いや願い	学習方法や取組方	自分自身への気づき
自己調整における研究実践の姿	町への思い 子供と教師、子供と子供、などの対話を通じて町に対する気づきを自覚する。	町探検に向けて 追究やパフォーマンスの過程で、「町の イイな つたえたい」の視点を踏まえながら、方略を検討・決定する。	思いや考えの変化、自分への気づき 対話で得た気づきを共有する活動を通して、より町を知るために探検に気づきを得たり気づきを高めたりする。
	・町のイイなはどんなところかな？ ・もっと町のイイなを探したい！	・グループで分かれて行きたい！ ・お店の人とお話ができるかな？	・気になる場所が増えたよ！ ・他にもイイなはあるのかな？

## 生活科「町の イイな つたえたい」研究実践について

研究実践においては、小学校1、2年生の生活科で育む地域への愛着形成過程において、地域への肯定的な印象を形成する段階には、地域の人とのかかわりによるものと、地域に繰り返しかかわることによる影響があることを山本・加納(2016)は明らかにしています。また、田村(2017)は、「地域と生活」の領域においては、児童が地域と関わる活動を通して、見つけたことを、分類したり、比べたり、関連付けたりしながら、地域の様々な人々の仕事について、見つめなおすことや自分たちの生活は様々な人や場所と関わり、それが自分たちの生活を支え楽しくしていることが分か

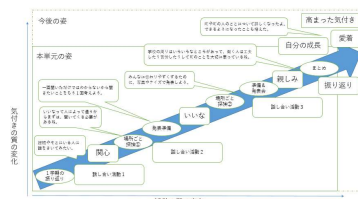


図1 気づきの質と活動質の変化の相関関係

ることにつながることや活動によって親しみや愛着やあこがれをもつことを指摘しています。このことから、児童が地域に出て様々な場所を調べたり利用したり、様々な人と接したりすることを通して、地域やそこで生活したり働いたりしている人々について考える振り返りの充実を促しました。児童が、自分たちの生活と関わっていることに気付き、地域への関心や親しみを持ち、最終的には愛着にたどり着ける姿を目指して授業を考えました。

## 子供の姿から



図2 分類したり比べたりしている様子



図3 生活との関わりを感じている様子

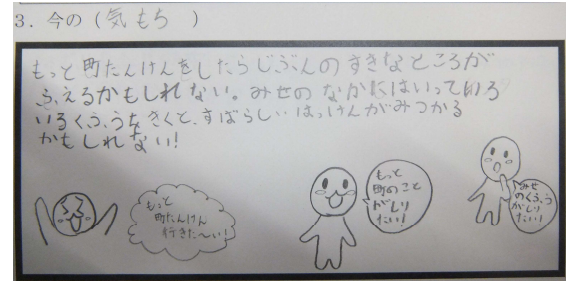


図4 親しみや愛着につながる気付きの初期段階

見つけたものを分類、比較、関連付ける場面（図2）では、「似たような建物や場所を見たことがあるよ。」「同じ建物でも大きさや見た目が少し違うね。」「ぼくの家の近くと似ていて、病院の近くに菓屋さんがあるね。」などの話が出ました。低学年においては、特に見てきたことを写真や動画で振り返ることが有効だと感じました。

また、生活との関わりに気付く場面（図3）では、「前に来たことがあるよ。」「ケーキを買う時には今度行ってみたいよ」「外にもケーキ屋さんはあるよ」などと発見したことを身近に考えている場面もありました。本校は、生活している地域が異なるため、自分の住んでいる地域や行ったことのある場所と比べて児童が関連付ける様子がありました。

学習を進めていく中の振り返り（図4）では、探検を繰り返すことでわかったことを整理したり気になることを交流していくことで、より良い学習方略を考えたり、親しみが芽生えてきたりする児童も見られるようになってきました。

## 研究から見えたこと

この3年間、生活科では「子供が学びをつくる」ために、場の設定や活動の保障、ICTの活用とともに、子供の気付きを学級全体や教師と共有することを大切にしました。また、子供が対象への思いや願い、取組方、自分自身への気付きを調整し、学びをつくる原動力としながら、学びを自覚し、自分なりに気付きの質を高めていく学びを目指しました。

「小学校1、2年生の生活科で育む地域への愛着形成過程において、地域への肯定的な印象を形成する段階には、地域の人とのかかわりによるものと、地域に繰り返しかかわることによる影響があること」と山本・加納（2016）が明らかにしたように、探検を繰り返したり、分かったことを増やしたりすることで図4のような子供の親しみや愛着の素地が養われることがわかりました。

子供達が目的を持つことで探検に行きたい気持ちを高めることができましたが、地域に対しての愛着形成においては、「町のイイ」という抽象的な部分をより明らかにして共通理解して進めることが必要であると感じました。

今後は、子供一人一人の思いをさらに高めるような授業展開や場の設定を考えながら、学びの充実を今後一層大切にしていきたいです。

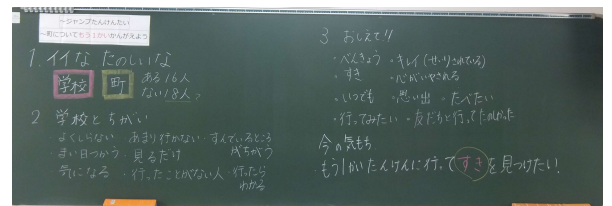


図5 イイについて板書に整理